
私の童話

yonaka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の童話

【コード】

N3926BA

【作者名】

yonaka

【あらすじ】

就職の面接の帰り道に、穴に落ち地球の中世な感じの異世界にトリップしてしまった。

王道好きの異世界の創造主に、彼の娯楽のため、王道の道を進むことを進められるけど、平凡な私は、平凡人生を歩むつもり。

お世話になっている孤児院で子供たちに地球の童話を話していると、いつの間にもその童話が流行り、出版された。貧乏な孤児院の為だと思いつつ、

異世界なので地球の著作権思いつきり無視、ごめんなさい。

王様の目にとまり騎士様が迎えに来た。これは、王道のフラグが上
がってしまった？
平凡な私の王道物語。

プロローグ 1

雲が、 一つもない 真っ青な空

清々しい 空気

太陽は、 サンサン

あー、 素晴らしい洗濯日和。

作者、杉山けいこ。

本当に私って文章力ないと思う。最後のせんとくものをのシーツを木と木の間に結ばれた紐に干し、私こと杉山けいこは、空を見上げた。

この空は、私が前に住んでいた所と同じに見えるのに、この空の彼方に私が居た町、日本、世界に繋がる事は無い。

気持ちいいそよ風が私の方より少し下まで伸びかかった黒髪を巻き上げた。ここに来た時は、髪もボブカットだったのに。本当に、月日は勝手に過ぎていく。

この世界でこの先、何日何年過ごしても私が20年間、生まれ育った日本人としての思考や習慣は、きつと変わることは無いだろう。

ゆっくりと日本では、触れることが無かった壮大な大自然に、この中世ですかっていう感じのこっちの生活に慣れてきている私もすごいかも。人間の順応性って素晴らしい。

でも、せめて洗濯機が欲しい、うん、無理なのは分かっている。でも、でも、決して乾燥機とかテレビ、電子レンジ、炊飯器、いやいやその他もろもろの便利な電化製品が欲しいなんてそんな贅沢な事は言いませんから、せめてこの世界のトイレをどうにかしてください。

誰にお願いしているかって、そう、あの日に逢った訳の分からないこの世界の創造者に心の中でお願ひしてみる。

でも、知っているもん。アイツが、この願ひを聞き入れることがないと。

あの日、アイツ、この異世界の創造者に逢った日は、私が20年間の間に生きてきて一番、最悪な日だった。

その日は、就職の面接で、ある会社のラジオのナレターの第一面接が終わった帰り道に

面接がうまくいったので自分にご褒美をしようと、バイトの給料日にしか行ったことがなかったケーキ屋さんに行くことにした。

今の気分は、王道のストロベリーショートケーキ。飲み物は、レモンティー、ミントティー、ミルクティー、いやいや、やっぱり王道のストレートの紅茶かな。

私は、いろいろなケーキのことを考えながら人気のない小路を歩いた。

このケーキ屋さん、高年のご夫婦がマスターの定年退職後に自宅の一階をリフォームしてにカフェをしている。

マスターは、設計の仕事していたらしくもちろんこのカフェも自分で設計して、お店の壁には、マスターの描いた設計図が木の額縁に飾られてそれを見るだけで一日を過ごすことができると思う。ケーキは、奥さんの長年の趣味って笑って言うていたけど絶対、趣味をこえている。プロの味。

このカフェは、アットホームな感じでやさしい時間が過ごせて、私の一番のお気に入り場所だ。

この隠れ家のようなケーキさんは、短大に入ったときに、小学1年生の時から親友の加奈子に連れて来てもらってから月に一回くらしい割合で通っている。

本当は、もつと通いたいけど自分の体型と財布の中身を考えるとつい。食べても太らない加奈子がうらやまし。私って食べる分しっかり肉になっていく感じ。そんなところだけしつかりしないでもいいのに。

このカフェに始めて加奈子と行ったとき、丁度、唯一の家族のおばあちゃんが亡くなって葬式とかいろいろあつて忙しくしてそれが終わった後、きゆうに何もしたくなって、寂しさと不安で鬱つだったときに、かのこに引きずられてこのお店にきた。目の前のショートケーキもどうでもよかった。

「けいちゃん。このケーキ、おいしいよ」

本当は、食欲があまり無かつたけれど目の前に心配そうに座っている加奈子を見て、一口食べた。

ケーキを一口食べたとき、心が温まる味があると思つた。ケーキを食べながら、おばあちゃんが亡くなった日から一度も泣けなかつたのに涙が出た。

「けいちゃん、がんばつたね。けいちゃんは、一人じゃないよ。みんな、けいちゃんのこと大好きだよ。私は、けいちゃんのお姉ちゃんになるよ」

その後は、加奈子に抱きしめられて思いつきり泣いた。それから、そこに何時間居座つただろう。お店の奥さんが何度もおしぼりと新しい紅茶を持ってきてくれた。

目を真っ赤にして、会計をした加奈子の後ろにときマスターに言われた。

「今日の会計は、いいのでぜひうちのお店をご贖済にしてくださいね」
てつきり涙が全部出したと思ったけどまた涙が出てきてマスターと奥さんがおろおろしていた。

「また、いつでもここに居るからいらしゃいね」

マスターと奥さんの笑った笑顔のあるは、この場所がいつの間にか私の大切な場所になった。

だから、二人も私の面接のことを気にしていたので上手くいったことを早く報告しよう。

この道は、何度も通ったことがあったので、周りを見ていなかった。

もし、あの時に自分に会えるなら「周りを見て歩きなさい」って、幼稚園生のようにただけど絶対注意するよ。

右足がマンホールより大きい黒い穴に入ってバランスを崩して漫画によく描写されているように落ち方したと思う。

バンジージャンプ並みに落ちていくフリー落下。気持ち悪い。もう、地下に着いてもいいんじゃない。

誰、こんな穴を掘った人。責任とれ。訴える。もう、ダメ、気持ち悪いよ。

意識を手放すのって自分でも分かるんだなと思いつつながら、生まれて始めて意識を手放した。

プロローグ 2

誰かが私の頭をつついていて。微妙に痛い。まだ寝ていたいけど目を開けようかな。

あれ目の前に外国人の美少年が居る。まだ夢のなか。寝よう。二度寝入りは、気持ちいいというしね。

ぼか。

何、何、誰、今、私の頭を、ぼかって殴った。

目を開けたら目の前に、金髪碧眼の美少年が私も見ている、あの、かなり近いすぎるよ。

なに、そのすべすべのお肌、私にたいしての嫌味ですかと意味不明のことをつらつら考えながら、またもや、人生始めて口を開けて人の顔を凝視した。

今日は、人生初めてがオンパレード。

だって、目の前に天使がいる。女の子なら誰だって一度は憧れる美少年だよ。

「そのマヌケ顔、止めてもらえる」

その顔で生意気な口。許せません。神様、どうして。

「だから、私が神様だ。神っていうより、創造者」

私って最近思ってること口に出したりしているの。やっぱり、一人暮らしの人って独り言が多いっていうしね。気をつけないと。

「お前、顔だけじゃなくて頭もまぬけなんだな」

何、この子しれっと、失礼なこと言わなかった。それより、私口固く閉じているよね。私の心の会話聞こえている。まさか、唯漏れ。

「そう、唯漏れ」

いやー、恥ずかしい。この子、エスパー。

「もちろん、創造者だから。ちなみにこの子っていうほど子供じゃない。なんだったら、姿いろいろかえるよ。」

ドラゴンとか、真っ白いヒゲの長いような老人とか美青年とか、美少女、美女、後は、トリップ小説に出てくる神は小動物とかね。

私のトリップ小説研究によると主人公が男だと美少女か美女で、女だと美青年か、美少年。そして、今のような会話をする。

だから、私も金髪碧眼の美少年です。どう、王道。すごくない。

まさか、自分が王道を体験する日が来るとは感激です。この記念する日を祝して願いを三つかなえてあげよう。

もちろん、願いを増やすとかなないからね。きゃ、これも王道せりふです。感動。さあさあ、王道会話しましょう。で、何を願う」

なんのお願い。いまの状況が分からない。まあ、私も王道大好きだけど。それよりなにこの人。地球を作った創造者。

「やっぱり、気が合うね。これから王道会の同士だから、下僕って呼ぶね。」

私は、地球の創造者じゃない。一回しか説明しないからよく聞いていてね」

下僕って。いつ王道会にはいった。

「はい、アテンション、プリーズ。ここは、下僕がいた地球じゃない別世界。この偉大なる私がつった別世界。

この世界の住民は、ディランドってよんでいて私のことはディランド神ってよんで居る。」

下僕も私のことを呼ぶ名譽を挙げよう。あだ名でディーでいいよ。

それで、それぞれの世界は交わることが無いけど私は、君の世界の物が大好きでよく見に行くんだ。その時に少しの間、時空を開いたら下僕が落ちたと言うことだ。

それでも、すごいタイミング。ちょうど、あの時間、あの場所は、無人という予定だったのにな。

今回の事で、地球の創造主にバレて、もう、そっちの世界に干渉できなくなってしまった。おまえのせいだよ」

この展開、悪いフラグ立っている。

「まあ、いい。これでも私は、心が広いので許さしあげよう。と言う訳だ」

最悪フラグ回避？

「それで、願い事なにか」

別に願い事って、まるでイソップ物語の「金の斧、銀の斧」みたい。それより、さっきの場所に戻して私の前に一生顔を出さないようにお願いしよう。

もちろん、今のことを全てわすれるようになって、これで三つのおねがいだね。うん、それでいい。

「まぬけ、なんなら女神に変身しようか」

まぬけと下僕どっちがマシなんだろう。

「やっぱり、おまえの頭はまぬけだな。なんでなんだろうな。下僕こそ創造者は、素晴らしい世界を作ったのにやっぱり一人位失敗作っているんだな。」

つまり、二度と地球に干渉できなくなったって言ったよね。だから、下僕が、元の世界に戻ることはできないの。わかった」

何言ってるのこの人。人じゃないけど。二度と地球に帰れない。加奈子に会えない。マスターや奥さんに会えない。奥さんのケーキたち。

私って、こいつとずっとここにいないといけないとか。いや、ぜっ
たい、いやです。断固拒否。

もしかして、死んだら元の所に戻れるという、パターンね。

「それないから」

せつかく、人が現実逃避という心のオアシスと言う所にいるのに呼び戻すな。

「ここは、世界の狭間で下僕は仕方ないから私の世界に住んでもらう。感謝しなさい。どう、これから王道の異世界トリップ経験するの。」

やっぱり、え、私って、異世界でチートで、魔物を倒し世界の勇者とか、救世主、神子、いや、巫女とかになるの。

とか、期待されたら困るからいうけど私の世界は、地球と同じで時代は、中世止まり。中世ってトリップの王道でしょう。

魔物とか、魔法とかないから、地球の中世と同じ、だって、地球を真似して中世を造ったから。

私って想像力が無いので真似しました。自己申請です。えらいでし

よう。てへ。」

てへ。てへってする人始めて見ました。人じゃないけど。

「私が、世界を造って500年。なぜか、世界は相変わらず変わらないんだよね。私の住人、私に似て想像力が無いのかも最近おもうんです。

他の王道パターンは、OKだよ。不動第一王道パターンは、やっぱり王子とか王に見初められて、後宮で大奥、異世界版するとか。

あとは、皆大好きな前の世界の知識を使って世界を変えていくサクセスストーリー。」

私的には、このパターンをお願いしますよ。やっぱり、いい加減に時代の変化があってもいいよね。

後は、恋愛要素があって、うん、これで、私の暇つぶしができるよ。恋愛相手は、王家は、さっき言ったからNO 1は、騎士かな、うん、いいね、後は、公爵とかの貴族、隠された王子、妾の子の身分の低い王子とか。

陰謀に巻き込まれた王子、なぜか奴隷にされた王子とか。かなり、いい線だと思わない。それと、村長の息子でもいいし、最強の剣士もいいかも、魔法が無いから魔術師って線消えたね。盗賊の頭っていうのもいいね。

下僕には、王道で騎士と恋愛してね」

誰でもいいので、この人を抹殺してください。盗賊頭って何。結婚は、普通のサラリーマンが一番。最近は、公務員？

「下僕、私が一応神っていうこと忘れてるの。まあ、いいわ。わたしは、心広いので。」

あー、そうそう、下僕の今後異世界トリップの王道の道を歩むためのシナリオね。

やっぱり、王道は、逆ハーね。あと、悪女ができて健気に耐えてヒーローに助けられてハッピーエンドね」

私は、できるだけ地味に生きたい。だいたい、この平凡を描いたような容姿でどこをどうやったら王子を引っ掛けられるの。

まして、逆ハーレムなんて、それこそ無理、自分には、永遠に無縁。20年間生きてきた、彼氏のか、の頭文字も経験したことのないこの私女には、逆ハーレムとかハードルが高いよ。
平凡人生万歳。

「キター。平凡。最近、平凡の主人公多くない。異世界にいつて異様に美形に日本人の童顔受けてモテるとか。あと、かわいい顔の青年が美少女に間違われるとか。

うーんいいね。やっぱり、王道は、顔が平凡なのに黒髪黒目が珍しくて神秘的だとかでモテるパターン。期待させて悪いけど黒髪とか、黒目の人って普通に居るからね。

願い事は、絶世の美人にする。傾国の美女になって、世の男を虜にして王道ドロドロってというのは。もちろん、オマケでそのぼちゃり幼児体型どうにかしてあげるよ」

ぼっちゃりって、幼児体系ってひどくない。加奈子の少し痩せたらかなりかわいさがアップするって言われてたから明日からりんごダイエットしようと思ったのに。

今日食べるケーキって、見逃して。傾国の美女なんてお断り。私も20年慣れ親しんだこの顔気に入っているもん。

「で、願い事何にする。金持ち、若さ、あとは、権力とか。不治不老とか、異様な力とかは、異物で、却下ね。

王道は、好きだけど戦乱とかあんまり好きじゃないしね。なんたつて、私は、心の広いもんね。

どれにする。なんだったら、下僕を一回殺して転生ものにする。そして、前世の記憶をもって生まれた王女とか。いいね。転生もの王道』

さっきから、自分で心が広いつて宣伝してそうゆう人が心が狭いつて、一般にいわれているのに。

「それ、本当」

「本当」

はじめも言葉出したかも。目の前の美少年、何か落ち込んでる感じがする。

「殺されるのは嫌なので転生じゃなくトリップでおねがいします。それと、普通の短大の文学科だったので、専門知識何て無いので世界を変えるとか、サクセスストーリーとか期待しないで、

私のことは、ほっといてください。これ、おねがいじゃなくて、注意です」

私は、絶対に三つのお願いを叶えてもらうためにアイツにお願いした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3926ba/>

私の童話

2012年1月10日07時11分発行